

ラスボスの思想(1)



ウルトラマラソン



春日信彦



目次

1

AI 依存症

誰しも、情報過多の時代において、自分の心をじっと見つめる時間を作り出せるのだろうか？

小説を読むことにおいても、書くことにおいても、小説は読者もしくは作者に漠然とした問題を投げかけてきます。問題を受け取った我々は、少なからず思考し、悩みます。その悩みが、大きく膨らむ人もいれば、即座に消え去っていく人もいるでしょう。

小説は娯楽ですから、読み終わって、書き終わって、自己満足すればそれでいいのですが、それでも、小説は、読者や作者の心の底に不可思議なわだかまりを残していきます。

2

読者は、架空の世界を体験し、一方、作者は架空の世界を創造します。架空の世界ですから、そこで悩んだとしても、別に、現実の世界で困るわけではありません。

でも、この架空の世界は、人間について悩むことを誘導します。言い換えれば、”自分について、もっと、もっと、悩みなさい”と訴えてくるのです。この点は、最も、小説の特徴的なことではないでしょうか？

人間については、医学、生物学、物理学、心理学、経済学、など自然科学、人文科学を通して考察されていますが、やはり、人の心については、科学と対峙する小説が、もっとも、突き詰めて考察しているのではないのでしょうか？

3

今後、ますます科学が発展し、人間の知能を凌駕する AI が、社会を構築し、人間を操作するようになれば、人は、自分のことについて、悩まなくてもいいようになるのでしょうか？

近い将来、おそらく、AI は、いかなる問題にも回答を出せるようになるでしょう。かなり具体的で難解な心の問題についても、きっと、模範解答を出すことでしょう。

そうなれば、人は、自分の心について、悩まなくてもいいことになります。仮に、そうなるしまえば、心の問題をテーマとしてきた小説は、この世から自然消滅してしまうのでしょうか？

4

極端な話になってしまいますが、自殺志願者が、自殺すべきか、それとも、思いとどまるべきか、AIに問いかけた時、AIは一体どんな回答をするのでしょうか？

AIは、自殺の必然性を説き、自殺を推奨するのでしょうか？ それとも、道徳的な判断から、自殺を否定するのでしょうか？ 人が、極度のAI依存症に陥ってしまえば、自分について深く悩むことなく、AIの指示に従うかもしれません。

AIと人間の最も違う点は、AIは、一切、悩まないということです。人間は、生きている限り悩むのです。悩むから、苦しみ、自殺もするのです。AIのように知能が高く、一切、悩まない人間がいたとして、彼を最も優秀な人間だと言えるのでしょうか？

5

いずれ、人がAIに依存し、生きていく時代はやってくるでしょう。でも、人がAIになるということはありません。つまり、人間の脳細胞は、永遠に悩みを作り出すのです。

悩みが永遠に存在するならば、人は、悩み、苦しみ、自分について考察し続けるでしょう。また、小説も存在する可能性があります。

人は、悩むことを喜びません。むしろ、この世からすべての悩みが、消え去ることを望みます。でも、悩まなくなるということは、もはや、人間ではなくなるということなのです。

6

人は、悩みに耐えかねると自殺する場合があります。でも、悩みは、科学を生み出し、創造の原動力になってきたのです。また、悩みがあるからこそ、小説は人間に必要とされ続けてきたのです。

今、私は、小説を書き続けています。それはなぜか？ 読者のために娯楽を提供しようと思う気持ちがあるからでしょうか？ 確かに、それもあつたでしょう。それ以上にあるのは、心の底からこんこんと湧き出す悩みがあるからだと思います。

小説を書けば書くほど、悩みは、さらに湧き出てきます。悩みがあるということは、生きている証であるということであり、自分を考察し続けているという証でもあるのです。

7

地獄の時間

誰も知っていることですが、人は必ず死にます。つまり、いかなる細胞も、時間的制約を受けています。だから、人は、与えられた時間はわからぬとも、時間的制約を受けているがゆえに、その時間内に必死に何らかの活動をやって生きていきます。

小説を書くということも、小説を読むということも、与えられた時間内の各自の自由行為です。自分の行為を中心に考えれば、ある行為をやることによって、時間を消費しているように感じますが、時間を中心に考えれば、与えられた時間があるから、何らかの行為ができることになります。

細胞は、時間に制約されていると言いましたが、時間は人間が作り出した記号でしかありません。その時間という記号は、過去と未来を表すことができます。もし、時間という記号がなければ、人は、今という現在にしか生きることができず、死というものも考えることができなくなります。

8

人間は、地球上に存在する生物ですが、その生物を人間として認識しているのは、記号なのです。言い換えれば、人は、記号を失えば、時間も、空間も、物質も、失ってしまうのです。

人間は、記号を作り出し、記号からなる社会を構築し、記号による人間関係を作り出しました。お金も、常識も、感情も、すべて、記号の産物と言っていいのです。すでに述べたように、小説も、記号の集合体でしかありません。

ここで、時間に生きることについて、最近人気のウルトラマラソンを例にとって、考えてみましょう。マラソンといえば、42.195 キロ走る長距離レースですが、さらに長い100 キロも走る過酷なウルトラマラソンがあります。

9

ウルトラマラソンには、14 時間以内に走りなさいという残酷な時間制限があります。さらに、区間ごとの時間制限まであります。最悪の場合、第一関門で脱落することもあるのです。不思議なことに、全国には、このような地獄のようなレースに参加者する人たちがかなりいます。

レースには脚力に自信がある人たちがエントリーしていますので、100 キロを完走できる人たちが結構います。でも、10000 人を無作為に抽出して、走らせれば、完走できない人のほうが多いに違いありません。

今から考えることは、地獄レースを好む人たちの特異性についてではなく、生還可能時間として、14 時間が与えられた架空の地獄の世界を考えてみます。

10

そこで、エンマ大王によって、14 時間内完走という地獄からの脱出条件を与えられた人々について考えてみます。

この地獄の世界では、14 時間の猶予時間が与えられるから、各自は、その時間をどのように使ってもいいのです。

例えば、足が痛くなれば、30 分間休憩するとします。休憩を度々繰り返すと、区間の時間制限があるために、第一関門で地獄につき戻されることになります。

11

多くの人は、地獄から脱出しようとひたすら各区間を制限時間以内で走ります。でも、膝が痛くなったり、おなかが痛くなって、走りたくとも、走れなくなる場合も出てきます。たとえこのような事情があっても、制限時間以内に走らなければ、地獄につき戻されます。

いくつかの関門をクリアした人たちでも、14時間以内にゴールできなければ、地獄につき戻されます。無事、14時間以内にゴールできた人たちだけが、地上に帰ることができます。

幸運にも残虐な地獄から生還できたならば、誰しも、二度と地獄の世界には行きたくないと思われそうですが、不思議なことに、全国には、このような地獄の世界に、自ら再度飛び込み、生還を繰り返す変態的な人たちがいます。

12

ここで言いたいことは、人というものは、かなり頭がいかれている、ということではなくて、人は、時間に対する意識をなくした時でも、必死になって生きていくのだろうか？ということなのです。

現実では、人は明確な寿命を知りませんが、”必ず死ぬ”ということは知っています。だから、今を、一生懸命に生きて、エンジョイするのです。

仮に、”人は永遠に生き続ける”とするならば、どうなるのでしょうか？人は、喜ぶのでしょうか？それとも、逆に、発狂して、自殺する人たちが増加するのでしょうか？

13

人は、時間を創造し、その時間に規制され、もがき苦しみます。だからと言って、時間を捨て去ることはできません。人は、犬や猫のように、今だけに生きることができないのです。時間があるために、過去に生きたり、未来に生きることになるのです。

永遠に、人は、時間という呪縛から逃げ出すことはできません。でも、予知できない死が待ち構えているからこそ、今を幸せと感じることができるのではないのでしょうか？

ラスボスの思想(1)

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
